一貫性、整合性のために敢えて收錄されなかったと思われるが、本書理解の一助として參照されることが望まれる。又、望蜀の感があるが、大谷氏による概說的な清代政治史、思想通史が執筆されることを期待したい。

一九九一年二月　東京　汲古書院
B5判　五八五頁＋索引二九頁

Joseph W. Esherick and Mary B. Rankin eds. *Chinese Local Elites and Patterns of Dominance*

岸本美緒

アメリカ合衆國を中心とする英語圏における近年の中國史研究——特に明清から近現代に至る時期の社會史研究——の瞠目すべき充實ぶりについては、日本の研究者の共に實感するところであろう。本書は一九八七年にカナダのバンフで開かれた同題の會議の成果であり、そうした英語圏の若手・中堅の研究者の力量を感じさせる書物である。會議に提出された一八本の報告の內、本書には一一本が收錄され、編者エシェリック、ランキン兩氏による大膽で行き屆いた前言と結論とが附せられている。

本書は、單に中國地方エリートに關する論文を集めただけのものではなく、明確な方法的主張をもっている。中國地方エリート研究の現狀と課題とは、編者によって、どのように把握されているのか、以下まず前言によってまとめてみよう。

英語圏において、中國地方エリートに關する體系的な研究は、まず紳士 gentry 研究として開始された。張仲禮や何炳棣など中國系の研究者によって擔われた初期の紳士研究は、エリートを紳士卽ち科擧資格保有者として定義するものであった。そこでは、地方社會とエリートの關係よりも、官僚ないし科擧資格保有者であるエリートと國家との關係が重視され、地方エリートの基本性格は、地方社

會のダイナミックな變化に對して超然たる靜態的な型においてとらえられる傾向があった。一方、同じく紳士層に注目しながら、國家との關係よりもむしろ地方における社會經濟的基礎を強調してきたのが日本の研究であり（ここで重田德の鄉紳支配論などが紹介されている）、そこでは、土地所有や水利への關與など、地方社會における紳士の活動と支配が關心の焦點となった。王朝末期の國家權力の弛緩と共に地方エリートの力が增大してくることを指摘するいくつかの研究（例えばフィリップ・キューン）も、エリートの力の根源を地方社會に歸するものであるが、これらの研究には、國家と地方エリートとの關係を「ゼロサムゲーム」と見なす傾向があり、エリートの支配を、本來の秩序維持機構である國家の弱體化に伴って成長するインフォーマルな補完物とする前提があるように思われる。しかし、イスラム社會研究者のアイラ・ラピダスが述べたように、「中國の社會を、全體的構造の視點からでなく、個々人の選擇と行爲の結果として研究する時」、一見本來の制度からの逸脱のようにみえるインフォーマルな動態の中にこそ、中國社會の本來の姿を見出すことができるのではないか？

さらに、近年の地方社會史研究の中で明らかになってきたことは、單に紳士としても定義できず地主としても定義できない、エリートの性格の時期的・地域的多樣性である。時には商業的富により、時には軍事的力によって地方社會を支配する、地方エリートの多樣な性格をどのように整合的にとらえるべきか。

そのためには、「富」「地位」「政治權力」などのカテゴリー或いは「生產手段の所有」などの基準によるエリートの本質論的定義を斷念し、「地域的な場において支配力を行使している諸個人ないし諸家族」としてまず漠然とエリートを定義した上で、彼らが、様々な活動の場（arena という語は、村、縣、國家など地理的範圍のみならず、軍事的、教育的、政治的といった機能的領域をもさす）において、様々な資源（resource という語は、土地所有や商業的富といった物質的資源、血緣集團や人的ネットワークといった社會的資源、技術的能力や宗教的力といった個人的資質、名譽や生活様式といった象徴的資源等、支配力を基礎づける諸要素をさす）の間でどのように戰略をたて選擇を行ってゆくか、その過程を分析する必要がある。

本書では、時期的・地域的に多樣な事例研究を集めて、エリートがそれぞれの狀況に應じてどのような戰略をとっていったかを分析するとともに、その背後に通底する共通の特徴を抽出する。それによって、ヨーロッパのエリートなどとの、より廣い視野での比較が可能になるであろう、と。

以上、本書の問題視角は明確である。從來の中國エリート研究は、エリートの本質を定義しようと試みて、それに失敗してきた。官僚・科擧資格保有者たる側面を強調するか地方社會における社會的經濟的支配力を重視するか（所謂「國家と社會」問題にかかわる論點）、また、科擧資格、土地所有、文化的教養、商業的富、軍事力、等々の中でエリート權力の根源をいずれに求めるべきか――こうした點に關して、様々な見解が並立しつついずれも決定的な解答を得るには至らなかったのである。かつて重田德が「鄉紳支配論」を提出するに當たって直面していた問題狀況も、これとまさに同質のものであったように感じられる。すなわち、「官僚主義の落とし子」としての鄉紳像と「自治的社會團體の指導者」としての鄉紳

像、或いは、科擧資格と土地所有という二つの契機から導き出される、どうしても重なり合わない鄕紳のダブル・イメージ――こうした問題を解決しようとした重田の議論は、地主制を鄕紳範疇の中核に据える基本的立場を維持しつつ、そこに「土地所有に基づかぬ支配」「集權制の傘」など、地主制の枠にはまりきらない政治的・社會的・文化的諸要素を可能な限り組み込もうとした力業であったということができる。それに對し、本書の方法は、エリートの定義自體に様々な要素を附け加えるかわりに、エリートの本質規定をいったん斷念するところから出發している。何者とも本質的には定義できないが、ともかく衆目の一致するところ中國社會に明白に存在する地方有力者層――彼ら個人個人がそれぞれの狀況に應じて多様な戰略をとる、その選擇プロセスの理解を通じて、その多様な存在形態を生成的・整合的に說明しようとする行爲論的方法（行爲論という語は本書で使用されているわけではないが、個々人の行爲を基礎的單位として社會現象をとらえ、個人の選擇プロセスに遡って社會現象を說明しようとする方法、という意味で以下使用したい）が、ここでは明示的に提出されている。從來日本の研究では、「エリート」という語はあまり使用されておらず、それは、「エリート」という語の無規定性に對する日本の研究者の暗默の忌避を示しているように思われる。しかし、本書において「エリート」という語が使用されている理由は、まさにその戰略的無規定性にあるのである。

このような議論は、社會科學方法論の分野では、必ずしも新しいものとはいえないであろう。しかし、これが單なる方法論の領域での抽象的な議論にとどまらず、地域的には中國全土、時期的には明代から民國期に至る廣い分野をカバーする充實した事例研究を通じて共同で追求されていることは、やはり壯觀であり、アメリカの中國史學界のもつ方法的求心性、その生み出す力といったものを感じざるを得ない。それでは、個々の論文では、こうした方法はどのように生かされているであろうか。紙幅の關係で簡單な紹介に止まらざるを得ないが、以下順を追って紹介してみよう。

Timothy Brook, "Family Continuity and Cultural Hegemony: The Gentry of Ningbo, 1368—1911"

明清時代における寧波の諸名族を取り上げ、彼らが様々な戰略により、安定した「貴族的」な地位を保ったことを指摘する。戰略の內では、姻戚關係、學問結社などが重要であり、總じて清代の寧波名族は、強固な「文化的ヘゲモニー」を維持していた。清末に至って、商業的富に基礎を置く新興のエリートが成長してきたが、傳統的エリートの特權に反對する抗糧暴動の不成功が示すように、一九世紀半ばにおいても傳統エリートの支配は安定していた。文化的素養と人的結合に基づき、地方社會における安定した地位を志向した寧波名族の持續性が、本論文では強調されている。ここに描かれているのは、比較的オーソドックスなエリート像といえよう。

William T.Rowe, "Success Stories: Lineage and Elite Status in Hangyang County, Hubei, c.1368—1949"

漢陽縣の現存族譜の網羅的分析を通じ、多様な問題提起を行う論點滿載型の論文。隨所にヨーロッパとの比較の視點が見られる。第一に漢陽エリート宗族の持續性が指摘されている。が、族譜を使う限り、持續性しか檢出しえないのではないか。第二に、農業經營と

科學に重點を置く通説と異なり、宗族形成に當たって商業と軍事官職が重要であったことを指摘する。軍事官職の重要性から西歐封建制との類似性を示唆し、又、多様な資源を驅使する中國エリートの柔軟性が、工業化と國家建設に適應していく上でヨーロッパのエリートに比べ有利な條件を提供した、と論ずるあたりは大膽。第三に、宗族が、その直接の目的は多様であれ、エリートの地位を維持する手段として機能したことを論じ、その廣範な結集のあり方を、ヨーロッパのエリート家族の單獨性と對比する。

Madeleine Zelin, "The Rise and Fall of the Fu-rong Salt-Yard Elite: Merchant Dominance in Late Qing China"

清末四川富榮鹽場の有力鹽業資本の盛衰過程を詳細に追う。清初四川のフロンティア的風氣をうけつぎ、當地では紳士的行動様式よりも富の方が、エリートの要件として重視されていたが、一九世紀半ば以降、反亂の危機や經濟機會の擴大などにより、四川鹽業界に「外界指向」が高まると、捐納などによる官僚ネットワークへの參入といった紳士型戰略がとられていく、というあたりのディテールは興味深い。作者は概して、これら鹽業資本を、近代産業資本への「移行段階」を示すものとして、高く評價しているが、その評價は「資本＝賃勞働關係」よりもむしろ、集權的に統合された企業組織の性格に基づいているようだ。中國の傳統的企業の性格を「個人營業の連鎖」的特徴に見る有力な見解（これはネットワーク論と表裏するものといえよう）と比較するとき、こうした緊密な結合をもつ企業體の自生的成長をどのようにとらえるか、興味深い問題である。

Lynda S. Bell, "From Comprador to County Magnate: Bourgeois Practice in the Wuxi County Silk Industry"

二〇世紀初の無錫における蠶糸業資本家、特に薛壽萱に焦點を當てて、産業エリートの行動様式を分析する。先端技術を導入し國際市場を開拓する彼らの進取的産業資本家としての活動が、その一方で傳統的な「パトロン＝ブローカー」的な政治スタイル――鄉紳の家柄や土地所有に支えられた威信を媒介とする農民支配、中央政府や高級官僚との結びつきなど――と一體のものであった點に、作者の關心は向けられる。近代的性格と傳統的性格との混合とも見えるこのような行動様式につき、作者が「實踐 practice」という語を意識的に用いているのは、中國固有の身についた實踐感覺という意味がそこにこめられているのであろう。しかし、それは、果たして「ユニークな」中國的特徴といえるだろうか。また、國民政府の蠶糸改良委員會による統制などを、傳統的ネットワーク戰略の枠内でとらえることができるだろうか。

R. Keith Schoppa, "Power, Legitimacy, and Symbol: Local Elites and the Jute Creek Embankment Case"

浙江省山陰縣天樂鄉の麻溪壩をめぐる地域的水利紛爭というミクロ事例の強みを生かし、鄉内の富裕地域と貧困地域、エリート階層間の對抗關係と共に、貧困地域におけるリーダーシップの推移が詳細にあとづけられる。エリート自身の戰略のみならず、大衆が自己の利益にもとづきリーダーを選擇してゆく過程に焦點が當てられていることは、本論文の特色といえよう。その選擇が、直接の經濟的利害よりも、文化價値・シンボルといった「支配の用具」の活用による正當性觀念の操作に導かれていることも、作者の強調するところである。なお、本研究には、パトロンとしてのエリートと地方の

公的利害の代表者としてのエリート、地域的利害を「私」とみなすか否かなど、「公私」觀念とその變容にかかわる興味深い論點が含まれているが、十分に展開されていないのが殘念。

Edward A. McCord, "Local Military Power and Elite Formation: The Liu Family of Xingyi County, Guizhou"

貴州省の中でも邊境に屬する興義縣の劉氏を取り上げ、エリートが多樣な資源を活用して成長してゆく過程をあとづける。一九世紀第三四半期の反亂期に軍事的エリートとして擡頭した劉氏は、一九世紀末にはすみやかに武力を放棄して、教育事業の保護者として上層官界における人脈をつちかう。二〇世紀初頭の反亂期には再び團練を組織すると共に、新政にも積極的に關わり、辛亥革命に際しては、革命派に寢返ると見せて省政府をのっとる。狀況に應じた劉氏の鮮やかな轉身ぶりを描いて明快である。團練の結成が、單に反亂鎭壓を目的としたものでなく、他のエリートとの抗爭の中でのしあがってゆく手段であった、という指摘も面白い。

Lenore Barkan, "Patterns of Power: Forty Years of Elite Politics in a Chinese County"

二〇世紀初頭から一九三八年に至る江蘇省如皋縣の權力構造を五期にわけて考察したもの。本書の中では恐らく、「國家—地方社會」の二元對立圖式が最も鮮明に出ている論文であり、國家、地方エリート、地方社會などをそれぞれ圓で示し、その離合對立をあらわした各時期ごとの概念圖が描かれている。その推移は概略、①清末期、エリートを媒介とした國家と地方社會との結合 ②軍閥支配期、國家の弱體化に伴う地方社會の自立とエリート支配の確立 ③北伐期、國共兩黨による對エリート攻擊 ④一九二七夏、エリートの撤退 ⑤エリートによる地方支配を排除することも統合することもできなかった南京政府のもとでの、國家、エリート、地方社會の並立構造、といった形で整理され、併せてジェネラリストからスペシャリストへ、というエリートの性格變化も指摘されている。

David Strand, "Mediation, Representation, and Repression: Local Elites in 1920s Beijing"

バルカン論文と同樣、國家と大衆運動とに挾み打ちされたエリートという位置づけでエリートの諸戰略を描寫する。自治の餘地が殘されていた江北と比較して、權力のお膝元の北京では、エリートをめぐる狀況は、より壓迫的であった。軍閥の力と大衆運動との狹間で北京エリートは人脈政治を展開しており、その中から、市民社會的自治をめざす安廸生のごときユートピア的方向性も出てきたが、そうした方向性は、國家と大衆運動の壁にはばまれ、ブローカー的に地方政治に參與するか（孫學仕）、或いは地方政治から撤退して、より個別的な利害に集中するか（瑞蚨祥の孟氏）といった、より現實的な方向へと分化していった、とする。

Rubie S. Watson, "Corporate Property and Local Leadership in the Pearl River Delta, 1898—1941"

香港新界の一村落でのフィールドワークに基づき、族田の機能を考察する。新界や珠江デルタにおける宗族共有地の比率の高さ、族田を槓桿とする司理（管理者）の受益と族內支配、宗族機構と村落行政機構とを兼ねる堂の性格、などが指摘され、華北や長江下流と比較して、廣東における族田がエリート支配を支える重要な役割を果たしていたことを結論する。しかし、廣東における族田の重要な機能を指摘するのみならず、なぜ廣東において他の地域と異なりこ

のような共有財産が重要であったのか、それをエリートの「選擇」の問題として論ずることが、本書の趣旨からすれば必要であるように思われるのだが。

Prasenjit Duara, "Elites and the Structures of Authority in the Villages of North China, 1900—1949"

『中國農村慣行調査』を使用して、二〇世紀前半の華北村落の權威構造を分析する。他地方と比較して經濟的卓越性に缺ける華北村落エリートの地位は、取引を媒介・保障する中人の活動を通じての非エリートとの互酬關係によって支えられていた。民國期に至り、地主の不在化などに伴い村落エリートが沒落していった村々では、中人活動が、大地主のエージェントや親戚關係に擔われた。階級對立よりむしろエリート不在の構造による社會不安こそが、革命運動の背景をなした、とする。エリートの存在が必ずしも自明ではない華北の狀況は、本書のエリート定義、エリート像の問題點を期せずして顯在化させるもののように思われる。作者は、エリートの要件たる「富と力」とは必ずしも重ならない「權威」という概念を導入して、富裕でなくても公益的活動の遂行により權威を獲得していた人々の存在を指摘する。しかし、彼らが村落においてある種の支配を行っていたとするならば、そして、本書におけるエリート定義の核心が「支配力の行使」にあるならば、かれらをエリート範疇でとらえてはいけないのだろうか。

Stephen C. Averill, "Local Elites and Communist Revolution in the Jiangxi Hill County"

一九三〇年に毛澤東が江西省の山岳地帶の尋烏縣で行った詳細な調査を題材に、革命の底邊をなす地方の政治過程において、地主—佃戸間の階級對立のみならず、エリート間の派閥抗爭が重要な役割を果たしていたことを指摘する、印象鮮明な論文。毛によれば、革命と反革命の立場は、共に下層エリートにおいて最も尖鋭に現れた。上昇過程の下層エリートが既得の利益に固執して反革命の立場をとったのに對し、下降過程の下層エリートは、沒落の危機感につき動かされて戰鬪的な革命リーダーとなった、という毛の指摘に依據しつつ、個人的上昇戰略から革命の基礎過程を動態的に說明しようとしている點、興味深い。毛澤東が詳細な戶別調査的記錄を殘したということ自體、當時の共產黨がこうした地方のミクロ政治に依據せざるを得なかった狀況を示唆するものとも言えよう。

さて結論部分では、個別論文を基礎として、本書の議論が以下の如く總括される。

本書では、エリートの多樣なあり方が考察されてきたが、それは果てしのない分化と無秩序を意味するものではない。地方的型の相違は、エリートが、中國社會に共有されたやり方で多樣な狀況に對應した結果として整合的に理解できる。では、帝政後期中國エリートの行動樣式の共通の特徵とは何か。

科擧資格も土地所有も安定したエリートの地位を繼續的に保障するものではない、という意味で、中國エリートの地位は不安定なものであったが、それにもかかわらず、現實に數百年にわたるエリート家族の存續を可能ならしめたものは、多樣な資源の中で機敏に選擇を行う彼らの柔軟性であった。敎育、商業的富、軍事力、土地所有など、多樣な資源によってエリートの地位は獲得され、それぞれの資源の重要性は、狀況によって異なった。

エリートの活動は地域内部で完結したものではなく、地域外との關係も重要であった。そうした場の中で、エリートは、宗族を形成し、姻戚關係や文人結社などのネットワークを培い、パトロネージや仲介・調停を行った。こうしたインフォーマルな個々人關係は、中國エリートをエリートたらしめる上で、極めて重要なものである。

非エリートに對するエリートの支配を支えるものは、直接の強制というよりは、エリートが公共事業やパトロネージ・調停などを通じて地方社會に貢獻しているという了解であった。互酬性の感覺に支えられた文化的ヘゲモニーが機能するためには、エリートと非エリートとの間に共通の文化・價値が保持されていることが必要である。服裝などの生活樣式、福祉事業への貢獻などの「象徴資本」は、支配實現のための重要な要素であった。

清末以降、全般的教養人としての舊來のエリートにかわって、企業家的エリートや軍事的エリートなど、機能的に分化した專門エリートが出現してきたが、これら新エリート層が、傳統的エリートの家系から生み出されていることに注目すべきである。地域社會における「公共的領域」の成長に伴って、エリートの地位も、インフォーマルな個々人關係に支えられるばかりでなく、地方社會の公的代表者としての性格を帶びてきた。エリートの力の伸長と共に、國家建設が進行したことは、國家と地方社會との溝を深めたが、このことは、また、國家と地方社會とを仲介する新興のエリート層の成長をもたらした。

以上、編者は、中國地方エリートの基本性格を、①多樣な戰略の間の柔軟な選擇、②人的ネットワークの重要性、③文化的ヘゲモニーによる支配、の三點に整理した上で、清末から民國期に至る過程で、中國社會の構造は大きく變化し、それに伴ってエリートの樣態も變化したが、變化に適應するその行動樣式自體（柔軟な選擇やネットワーク、仲介的機能など）には繼續性が見られることに注目している。

柔軟な選擇と人的ネットワーク、文化的ヘゲモニー――これらの議論は、一九八〇年代の日本の明清史研究の新潮流と大きく重なりあう側面をもつように思われる。日本においても、地方社會の構造を個人の選擇から解こうとする方向が近年追求されており、こうした論者のもつ中國社會のイメージは、本書におけるそれと極めて接近しているように思われるのである。しかし、こうした研究潮流は、いまだ發展の途上にあり、多くの未解決の問題を抱えている。その意味で、同樣の問題を追求している本書は、私にとっては、切實に面白く、樣々なことを考えさせられた。以下、本書の大きな方法的枠組に關し、數點の問題を考えてみよう。

第一に、中國地方エリートの基本性格として擧げられている「柔軟な選擇」以下の諸特徴についてである。個別研究において指摘されている各地方レベルでの具體的特徴――商業性の強さや宗族的結集の強さ、等――と比較すると、「柔軟な選擇」以下の特徴がレベルを異にする抽象性をもっていることは、容易に了解される。いわばこれらは、多樣な現象形態の基底にあるメタ・ルールなのであり、各地方ごとの特徴は、このメタ・ルールに則りつつ、かつ具體的な狀況に應じて人々が選擇を行う、その結果として說明される。

地域差或いは時期的相違を說明する上で、こうした行爲論的方法

のメリットは、一面では疑う餘地のないものであると私には思える。地域ごとの多様な樣相を單に並列したり、或いは、「先進」「後進」などのレッテルを事後的に外から貼るのみでは、不充分なのであって、個々の事象がどのような選擇の結果としてもたらされたのか、それを行爲者の行動を導くメタ・ルールと個々の狀況との複合として理解して始めて、多樣な事象を生成的・整合的にとらえることができる。同時に、このような生成的理解は、狀況に應じた人々の多樣な行動についての豫測を可能とし、また、それが當たらなかった場合には假說としてのメタ・ルールを修正するフィードバックを可能とする。

しかし他面では、「柔軟な選擇」以下の議論が、「帝政後期中國エリート」の行動樣式を說明するものとしては、あまりにも抽象的な定式化ではないか、という印象も受ける。確かに「柔軟な選擇」以下の諸指摘は、私が明淸の史料を讀んで受ける感觸と一致し、かつて私自身、實際にこうした論點を拙文の結論としたこともあった。しかしそれを、他の地域と異なる「中國の」特徵ということができるのか。前言に引かれたラピダスがイスラム社會について展開する「ネットワーク論」が、一般的方法論としての側面とイスラム社會論としての側面とを含む重層的な構造をもっていること、及びその諸側面の微妙なからまり具合については、最近三浦徹が精力的に分析しているが、本書の場合も同樣の問題が含まれているように思うのである。卽ち、一見フォーマルな制度が優越しているような「固い」社會（我々の印象では、西歐や近世日本がそうだが、イスラム社會から見れば中國もそう見えるのかも知れない）でも、これを個々人の選擇の結果としてみれば、「柔軟な選擇によって選びとられたリジッドな制度」としてこれを解釋することも可能かもしれない。また、あらゆる社會の人々は「柔軟な選擇」をするものであり、ただ、ある種の社會では、ある種の選擇肢の伴うリスクが禁止的に高いため、人々の行動は自ずと限られてくる、という議論もできるわけである。とすれば、「柔軟な選擇」とは、事實の中から新しく發見された中國固有の特徵というよりは、研究者がもともと持っていた方法的立場の確認に過ぎないともいえよう。

「帝政後期中國エリート」と限定するのであれば、彼らの行動樣式の特徵として、よりポジティヴな內容を追求すべく試みることも可能ではないか。たとえば、彼らの「柔軟な選擇」を導く基準は何なのか。本書では、槪して一般的な功利主義的論理を以て說明しているように思われるのだが、それでよいのか。「人的ネットワーク」は、どのような共同性の感覺に裏打ちされているのか。「文化的ヘゲモニー」を支える共有された文化價値はどのような中國固有の內容をもっているのか、等々。中國という巨大社會に一つの個性ある秩序をもたらしているものは、「柔軟な選擇」や「ネットワーク」そのものというよりは、背後でそれらを支える、共有された固有の社會感覺ではないだろうか。

個人の選擇と行爲を基礎に据えた社會分析法の最も強固な提唱者の一人であるウェーバーの場合、その關心は、それぞれの宗敎圈において人々の意志的行動を導く規準——その固有の內容を宗敎倫理の中からつかみとることに向けられていたといえよう。しかし、ウェーバーと同樣「共有された文化價値」を重視する本書において、その主眼は、人々の行動規準の中に內面化された中國的文化價値の固有な內容の理解ではなく、むしろ、中國のエリートが支配の戰略

の重要な一環として「象徴資本」や「文化的ヘゲモニー」を利用した、という點の指摘にあるように見える。「文化的ヘゲモニー」といった用語の頻出にもかかわらず、本書の讀者は、本來の意味での文化史的・思想史的關心を、本書の中に殆ど見出すことができないのである。傳統中國においてエリートたることの重要な基準であった德や教養についてのイデオロギー暴露的な説明は、少なくとも日本では繰り返しなされてきた、と私は思う。前述したように、本書の基本的觀點は、生產關係を基準とした階級分析とは無論異なるのだが、「象徴資本」「文化的ヘゲモニー」などの一見斬新な用語は、その實、文化價値を基本的に支配の手段と見なすその用法において、「イデオロギー」という語の陳腐な用法に案外接近しているのではないだろうか。その意味で私は、本書における「象徴資本」等の概念に、それ程の新しさを感ずることができなかったのである。ブルデューの「文化資本」等の語が本來もつ暴露的意義の斬新さは、中國の傳統的知識人よりむしろ、得々として中國傳統知識人のイデオロギー暴露を行ったりする今日の學者——卽ち我々自身——を分析するとき、より際立つようにも思われるのだが。

第二に、本書の分析が「エリート」を對象としているということに關わる問題である。本書では、中國の地方エリートが、巧みに資源を選擇し、ネットワークを形成することによって地方社會の支配を行っていった樣々なプロセスが詳細に論じられている。しかし、實際には、エリートのみが戰略をたて行動する主體なのではない。中國の地方社會が、一般庶民をも含め、安全と社會的上昇を求めて戰略をたて選擇を行う諸個人で成り立っていたことは、恐らく本書の著者たちも認めるところであろう。このような非エリートの動機と行爲は、本書の中でどのように扱われているであろうか。

從來のエリート研究に對比しての本書の一つの特徴は、それが在地社會と切り離された單なる靜態的なエリート論でなく、エリートによる「支配」の問題、卽ち、地方社會の被支配層との關係におけるエリート權力の動態的變化の過程に焦點を當てているところにある。しかし、本書を通讀すると、エリートの權力の問題を被支配者の選擇の側から説明しようとしている論文は、ショッパの研究を除けば案外少ないという印象を受ける。概して、エリートの權力は、エリートがいかに巧みに諸資源を利用したか、というエリートの戰略の有效性によって説明されているのである。大衆が、エリート支配の對象であり、また、時としてエリートを壓迫しエリートの戰略を左右するものでもあるという意味では、本書は大衆の重要性を決して輕視してはいない。しかし、本書では、大衆自體の戰略と行爲に關心が向けられているというよりは、むしろエリートの戰略と行爲を導く「外部狀況」「與件」として、大衆の存在が取り上げられているように思う。こうした視點の定め方は、ある意味で依然として英語圈の傳統的「エリート論」の枠組の中にある本書の性格を表していると言えないだろうか。

私見によれば、「支配」とは、エリートの戰略と行爲の問題であると同時に、被支配層の戰略と行爲の問題でもある。「支配」の問題は、例えば農業經營者がそれぞれの土壤にあった肥料や技術を選擇して最大の效果をあげる、といった一方向的な過程——本書の分析は些かこうしたイメージを想起させる——と異なり、「土壤」の側の選擇にも依存する社會的相互行爲の結果としてとらえられるべきではないか。ある地方でなぜある種のエリート（例えば軍事的エ

リート）が力をもてるのか、ということは、エリート自身が状況に對應した選擇を行った結果であるのみならず、大衆が特定のエリートのもとに結集することを通じて、他のエリートが淘汰されてゆく過程としても説明できよう。本書では、概して中國エリートの持續性が強調されているが、例えば明末清初の江南におけるエリートの激しい盛衰も又、中國エリートの一面の姿である。こうした激しい盛衰をもたらすものは、科擧試驗と均分相續に由來するエリートの本來的不安定性のみならず、實效あるパトロネージを求めて奔走する大衆側の選擇の流動性なのではないだろうか。

この問題を考えるためには、個々人の選擇と行爲に分析の基礎を置く本書の方法をより擴張し、エリートのみならず地方社會を構成する全住民の行爲モデルの中で地方社會の權力構造を解いてゆこうとする方向が恐らく必要であって、こうした方向性は、むしろ日本の明清地方社會論の中で萌芽的に出てきているように思う。そこでは、本書で扱われているエリートの選擇や、エリート中心的ネットワークは、より一般的な選擇論やネットワーク論の一部として位置づけられるであろう。また、エリートの定義そのものも、「地域的な場において支配力を行使している諸個人ないし諸家族」という本書の實體的な定義よりも、むしろ「ある人々がいかにして支配力ある者として認知されるのか」という、認知と合意の問題になってゆくと豫想されるのである。

第三に、國家權力の位置づけの問題である。前言には、「どのように中國の地方エリートを分析するか」という本書の中心的問いのコロラリーの一つとして、「國家は、官職や科擧資格保有に伴う富と地位の源として、或いは地方の政治過程における潛在的な決定要因として、どの程度重要であったのか」という問いが提起されている。個別研究の中でも「國家權力」は、エリートの行動を左右する要因として重視されている。しかし、先述の「被支配層」と同樣、「國家」もまた、本書の中では、エリートの選擇を導く「外部狀況」「與件」として與えられており、行爲論的分析方法の中に內部化されてはいないように思われる。バルカン論文やストランド論文にみられる、國家と大衆とに上下からはさまれるエリートというイメージは、そこに由來する。

そもそも「國家權力」とは何だろう。エリートの「權力」は、個々人の選擇と行動の結果として本書の中で詳細に説明されたが、それでは、國家の「權力」はどうなのか。それは、實體として、地方社會やエリートの外側に始めから存在するものなのか。それとも、エリートが地方社會の中での樣々な行動によって紡ぎ出すエリート權力と同樣、エリートが官僚たる側面において紡ぎ出す何物かなのであろうか。前言に引用されたラピダスの問いは、フォーマルな制度とインフォーマルな個々人關係との峻別を疑い、國家權力をもある種のネットワーク的な枠組の中で解いてゆく可能性を本來示唆するものではなかったろうか。しかし、本書では、こうした「國家權力」概念自體の見直しということは、殆ど追求されていないようだ。

地方社會に生きる諸個人の側からみれば、「國家權力」を體現するものは、諸々の地方官である。彼らは、地方エリートと競合しつつ、人々の選擇を導き、地方社會を「支配」する。彼らの支配力は、單に官僚制度上の正當な權限のみならず、私的ネットワークに大きく依存している。彼らの支配力が、直接的強制力よりも「文化

的ヘゲモニー」に依據していることは、むしろ常識である――このように考えれば、「國家權力」を、エリート權力とレベルを異にする地方社會外在的な實體としてとらえるのでなく、「地方社會において人々がエリートや地方官その他様々なファクターの中で何を選擇していくか」という問題の一部として、地方社會內在的に、かつ行爲論的分析方法の內部で、考察してゆくことが可能となろう。

「地方エリートは仲介者であった。彼らは、官の世界と地方社會との間で活動し、兩者に參與するとともに、ある意味ではいずれにも屬しきってはいなかった」といった文章が示すように、エリートを國家と地方社會の仲介者としてとらえる見方は、結論の後半でかなり明示的に提出されている。こうした「古典的」な見方が本書の末尾で登場することは、私にとってはやや意外であった。私の感覺によれば、「仲介 brokerage」という語が本書のキーワードの一つである所以は、本書の方法のネットワーク論的性格――卽ち、社會を制度化された團體の集合と見なすのでなく、個々人間に織りなされるネットワークの所產として見る方法的態度――にあるように感じられたのである。しかし、「國家」と「社會」との兩者が何か實體をもって拮抗・離合しているかのような二項對立の圖式は、ネットワーク論の對極にあるものではないのか。「仲介」という概念が、個々人間の關係で用いられる場合と、「國家」―「社會」間で用いられる場合とで、その背景にある社會認識・方法論は、微妙だが、決定的な變質を被っているのではないか。こうした私の違和感は、畢竟、本書の提起した行爲論的方法論がエリート內部の分析に適用されるに止っていることに由來するように思われる。エリートの行動は、個々人の選擇と行爲の結果として鮮やかに說明されているが、「國家」と「大衆」とは依然として團塊をなしつつ外部的與件にとどまっている――こうした印象を拭うことができないのである。

以上、極めて偏った形の書評となったことをお許しいただきたい。本書では、「個々人の選擇と行爲の結果」として社會事象をとらえようとする行爲論的方法が明快に提起されている。これは、私見によれば、近年の日本の明淸史硏究の新潮流と共鳴しあうものである。しかし問題は、こうした方法を、「エリート」といった、社會の一部に適用することにあるのではなく、民衆運動から國家權力論までを含めた、社會の全構造の分析法として採用し得るかどうかという所にある。戰後日本の明淸史硏究を導いてきた「大理論」と同じ大きさの理論を、こうした方向でたててゆくことが可能であろうか。英語圈の硏究者の眞摯な方法的模索に學びつつ、私も試行錯誤してゆきたいと考える次第である。

Berkeley: University of California Press
1990, 23cm, xvii＋450pp.